

宮沢賢治と生物学

片野修

宮沢賢治と言えば、死後に残された手帳に書かれていた「雨ニモマケズ」の詩や「風の又三郎」、「銀河鉄道の夜」などの名作で知られている。賢治は生前にほとんど認められることなく37歳の若さで亡くなったが、現在では19冊もの宮沢賢治全集が出版されるほど、多くの小説や詩を創作した。そのすべてを読んだわけではなく、賢治の全貌について書くほど私は賢治を知らないが、ここでは生物学に関連した著作に焦点をあてて、賢治がいかに広範な知識と見識をもっていたかについて論じてみたい。

1 「セロ弾きのゴーシュ」と「注文の多い料理店」

賢治の著作の中には多くの動物が描かれているが、よく知られているのは「セロ弾きのゴーシュ」であろう。この作品では、上手にセロを弾くことのできないゴーシュのもとに、三毛猫、かっこう、狸、野ねずみがかわるがわる訪ねてくるのだが、いずれもゴーシュは迷惑に思って追い出してしまふ。しかし、ゴーシュの演奏は動物たちとの交流を通して格段に上手になった、というお話である。

「注文の多い料理店」は、動物を撃って喜ぶハンターたちが、空腹の果てに偶然見つけたレストランに入って、ごちそうにありつけると思ったら、実際には自分たちが食べられる仕組みであることに気が付くという話である。そのために、賢治は動物を無暗に殺す人間を嫌っていたと思われる。実際、賢治はベジタリアンであるが、「ビジテリアン大祭」に書かれているように、ただ肉食を嫌うというよりは、ベジタリアンについてさまざまな議論があることを承知のうえで、肉食をしなかったと考えられる。

この二つの著作から、賢治が田舎の自然の中で育って、動物を愛していたのだろうというイメージが広く浸透し、それは一部では正しいのだが、別の側面もあることは指摘しておきたい。つまり、動物はみな愛すべきであるとか、動物を狩ったり食べたりすることは悪だとか、そういったたぐいの単純な思考を、賢治は決してとらないのである。なぜならば、賢治はものごとをありとあらゆる角度から見ることができるうえに、膨大な読書量による知識もなまはんかなものではないからだ。

少し具体的な話をしよう。賢治が描く動物はかわいいだけでなく、悪い奴も登場する。ただし、キツネは人を騙す悪い動物だとか、ヨタカは見た目も心も醜いといったステレオタイプの見方はしない。この点で、ヨーロッパの童話で、いつもオオカミが悪者でカエルが醜いように描かれるのとはちがう。かっこうが「カッコウ」と言えば、1万みんなちがうんです（セロ弾きのゴーシュ）と考え、穂吉と呼ばれたフクロウが一番温和しいようでした（二十六夜）と書いたように、動物には個性があることを十分認識していた。その中で、傲慢であったり、ほかの動物を騙したりする個体は、意地の悪そうなねずみ（ツエねずみ）、アマガエルを騙して搾取するトノサマガエル（カイロ団長）、無理難題を言う黒猫の事務長（猫の

事務所) という形で登場し、最後にはしっぺ返しを食らうことになる。

「なめとこ山の熊」という話は、主人公が小十郎というハンターである。小十郎は熊を殺してはいても、決してそれを憎んではおらず、熊の言葉も理解した。あるとき銃をかまえて熊に近づくと、その熊はまだ仕事があるから殺すのを二年待ってくれと頼んだ。小十郎が見逃すと、熊は二年後に約束を守って小十郎の家の前で死んでいた。その後、小十郎は大きな熊に襲われて命を落とすのだが、その熊は「おまえを殺すつもりはなかった」と言い、やがて小十郎の亡骸の周りには多くの熊が輪になって追悼した。

人を含めて動物には、生きていくために他の動物の命を奪うことも必要だということを、賢治は十分に理解していた。この点について次の節で考えてみよう。

2 食い食われる動物たち

「二十六夜」は、フクロウの子たちの物語であるが、そこでフクロウの子はフクロウの坊さんの説教を聞くことになる。坊さんは「こちらが一日生きるには、雀やつぐみや、たにしやみみずが、十や二十も殺されねばならぬ・・・この道理をよく聴きわけて、必ずうかうか短い一生をあだにすごすではないぞよ」と説いている。「氷河鼠の毛皮」には、毛皮でできた外套などを何枚も持っている紳士たちを襲った熊たちに、青年が「おい、熊ども。きさまらのしたことはもつともだ。けれどもおれたちだって仕方ない。生きているにはきものも着なけあいけないんだ。おまえたちが魚をとるようなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるように云うから今度はゆるしてくれ」と言い、熊たちも納得したことが書かれている。

これらの記述から、賢治が動物をただ愛すべき対象ではなく、自然の中で生きるために、食物連鎖の中で特定の地位を占めていることを認識していたと考えられる。この点でさらに興味深いのは、「蜘蛛となめくじと狸」という物語である。

ここでは、蜘蛛と銀色のなめくじと顔を洗ったことのない狸が競争していたが、はじめに蜘蛛が、次の年になめくじが、そしてさらに次の年に狸が死んでしまったとある。蜘蛛は蚊やかげろうを食べて、200疋もの子をもうけるが、そのうち198疋までもが蟻に連れていかれたり、行方不明になったり、赤痢にかかったりして死んでしまった。そして残った子と夫婦も腐って死んでしまう。一方、なめくじは、かたつむりやとかげを騙して食べてしまったが、最後にはあまがえるに塩をまかれて死んでしまった。顔を洗わない狸は、うさぎやおおかみをやはり騙して食べることに成功するが、やがて病気にかかって死んでしまう。蜘蛛となめくじと狸は地獄行きのマラソン競争をしていたというのが結論だった。

この話は動物が数多く生まれても生き残るのはほんのわずかであること、騙して捕食に成功しても、自分もいつ死ぬかわからないことを語っている。生態学がまだ発展しておらず、とくに日本ではまだ研究者もいなかった大正時代に、賢治は生態学の原理を理解していたと推測される。カントやヘーゲルを読んでいた賢治は、当時すでに翻訳されていたダーウィンの『種の起源』を読んで、競争や個体群や生物間の関係について学んだと思われる。

3 悪い個体は罰を受ける？

賢治が生物間の関係を描く場合、人間社会を投影していることが多い。「カイロ団長」では、トノサマガエルがアマガエルたちを酔わせて搾取することが描かれている。先にも紹介した「猫の事務所」では、黒猫の事務長が無理難題を言って部下を困らせるが、そこにあらわれた獅子が黒猫に怒って、事務所を解散させる。「貝の火」では、ヒバリの子を助けた子ウサギのホモイが秘宝「貝の火」をさずかるが、やがて偉くなるとともに傲慢になる。すると「貝の火」はしだいに色褪せ、ホモイは失明する。

「クンねずみ」という作品では、クンねずみはほかのねずみの成功をねたむので嫌われる。しかも、みなが共同一致団結和睦の精神でやらないといけないのに賛同しないので、「ブンレッツ者」として縛られてしまう。殺されるところに猫大将がやってきて助けてもらい、その子供たちの家庭教師をするのだが、猫の子たちがあまりにかしこいのでそねむことになり、それに怒った猫の子たちに食われてしまう。同じように、ツェねずみという話では、やたら文句が多くて嫌われたねずみが、最後にはねずみとりに捕まってしまう。

以上から、賢治に勧善懲悪の道德のようなものがあるとみなされることもあるが、良い性格をしていても報われない話もある。「二十六夜」では、一番おとなしく、お説教をよく聞いていた穂吉というフクロウの子が、子供に捕まって脚を折られ、やがて死んでしまう。「土神ときつね」では、樺の木のまわりに土神ときつねがやってくるが、ものしりで樺の木と仲良しのきつねに尊大な土神が嫉妬し、追い立てて殺してしまう。

逆に悪いことをしても救われる話もある。「蛙のゴム靴」では、カン、ブン、ベンという名の蛙がいたが、カン蛙が手に入れたゴム靴のおかげで、カンは美しいルラと結婚することになった。それを嫉んだブンとベンはカンを誘ってカヤの刈跡を歩かせ、ゴム靴に穴を開かせる。結婚式の後、三匹の蛙は穴に落ちるのだが、最後にはルラの父に助けられる。カンはルラと結ばれ、ブンとベンも真面目に働くようになった。

これらの話から、賢治は同じパターンのお話をあえて避けていることがわかる。ある話だけを読んで、賢治はこういう考えだと決めつけるのは、とても危険だと言えよう。

4 動物からの視点

賢治の動物で特筆すべきは、動物の立場になって話を作っている点である。ここまで述べてきたように、人間を投影した話もあれば、人間と動物の交流を描いた話もあるのだが、純粹に動物の視点を想像によって描いたものがある。

その代表作は「やまなし」であり、蟹の話である。谷川の底に棲む蟹の子供は、五月に上方を流れていく泡や魚を興味深く見ている。そこへかわせみが飛び込んできて魚を捕らえるのだが、お父さんに教えられるまで何だかわからない。十一月には今度はやまなしが流れてくる。蟹の家族はよい匂いに引き寄せられて、やまなしの後を追っていく。蟹のお父さんは二日経つと、やまなしは底に沈み、おいしいお酒ができると子供たちに教える。

この物語はあまりに美しいので、小学校の教科書などで紹介されることが多い。それに加えて、蟹の立場になって、川を流れていくやまなしや魚を描写するとは、何て独創的なのだろう。

「ブラントン農学校の豚」は農学校で飼育されている豚が、死亡同意書に印を押したうえで殺される話であり、豚の心境が細かく書かれているが救いはない。「よだかの星」では、よだかが見た目が醜いと言われ、毎晩かぶとむしやたくさんの羽虫を殺すということで自虐的になる。それをふりはらうように、よだかは空に向かって飛んでいき、やがて宇宙にまで到達して星になる。

外見がきれいでなかったり、人間の価値観で悪い動物だとみなされていたりするものに対して、賢治はやさしい眼差しを向ける。「雪渡り」という話は、二人の子供がキツネの幻燈会に参加する話である。そこで子供たちは、丁重にもてなしてもらい、おいしいものを食べる。最後にキツネの紺三郎さんは、「みなさんはこれからも大人になっても、うそをつかず人をそねまず、私共の今までの悪い評判をすっかり無くしてしまおうと思います」と閉会の辞を述べている。

賢治は農民の暮らしをよくするために、肥料の開発など農業指導に注力していた。その観点から、野生動物は農作物の食害をもたらすので、駆除すべき憎い対象となる。しかし、賢治が書いたものの中に、害獣という発想はない。むしろ、動物を愛し心を通わす物語が大半であり、近年ようやく日本でも普及しつつある「動物福祉」、すなわち動物が痛みやストレスを感じるような扱いを最小限にするべきであるという考えを、賢治はおそらく自然と持っていたのではないかと思われる。動物福祉というより動物虐待とみなされる三重の「上げ馬」（馬に急坂を無理やり駆け上がらせる神事）や沖縄の「アヒル取り競争」（海に放ったアヒルを手づかみで捕る競争）は近年批判され、中止に追い込まれつつある。

5 社会問題への警鐘

賢治の小説には、その後の日本社会を思うときに先駆的で、誰も思いつかないようなことが散りばめられている。賢治はそもそも生前にはほとんど注目されていなかったもので、社会への警鐘などと言うつもりはなかったのだが、博識で人間や自然への洞察に優れていたのも、その作品から現代のわれわれが学ぶことは多い。

「虔十公園林」では、子供らにも馬鹿にされていた虔十が空き地に多数の杉の苗を植える。虔十の世話によって杉はすくすくと育つのだが、平二という男に日当たりが悪くなるから切れと言われてしまう。しかし、虔十はしたがわなかったのも、平二に手ひどく殴られる。やがて、虔十も平二も死んだのち、虔十が植えた杉は立派に育ち、虔十公園林として愛され続けたとのことで、ここには自然再生へのまなざしがある。

植物についての話では、ほかに「鳥をとるやなぎ」も興味深い。鳥がすいこまれる楊があるということを知った子供たちが聞いて見に行くが、確かなことはわからなかったという顛末になっている。最近、能登の舳倉島でベニヒワという小鳥が植物に捕らえられる映像をテレビ

で見たが、「鳥をとるやなぎ」はそれを暗示しているようだ。

「グスコブドリの伝記」は、森の中で生まれたグスコブドリが妹のネリとともに、幼い時に両親を失って苦勞する話だ。それでもグスコブドリは、農民のために作物がよく獲れるように奔走する。やがてクーボー大博士の指導のもとに、海岸には二百もの潮汐発電所が建設され、そこでえられる電力を使って、肥料を空から降らせたり、火山をコントロールしたり、雨を降らせたりできるようになる。さらに、大きな火山を爆発させれば、炭酸ガスが増えて暖かくなるという考えのもと、グスコブドリは船で火山に向かって、最後は一人残って、火山を爆発させ、気候を暖かくさせることに成功し、皆は幸せになった。

潮汐発電所は1966年にフランスでつくられたのが始まりで、日本では現在ようやく実証実験が行われている段階である。賢治がどうして潮汐発電を知ったのかはわからない。また、火山の爆発は現在では気候を寒冷化させることが明らかになっているが、当時は逆に暖かくすると考えられていたようだ。いずれにしても、火山の爆発や降雨を人為的にコントロールしようとする試みは、地球環境問題に取り組むという点で斬新だ。

「よく利く薬とえらい薬」では、お母さんの具合の悪い清夫が森の中で野ばらの実をとりに行った。そこで見つけた透き通った実を唇にあてると、すがすがしい気分になり、かすかな音や匂いもわかるようになった。さらに家に帰ってお母さんに与えると、お母さんは急に元気になった。この話を聞いた欲深な大三は、人を大勢雇って、透き通った実を探すが見つからない。そこで、ただのばらの実を集めて、そこにガラスのかけらと水銀と塩酸を入れ熱すると、透き通った物質ができた。喜んだ大三がそれを呑むと、アプツと言って死んでしまったという顛末である。水銀といえば、水俣病による公害が思い出されるが、それは賢治が生きた時代より何十年もあとのことである。公害を引き起こした企業は、水銀が毒であることを知らなかったのだろうか。

6 風の又三郎と銀河鉄道の夜

最後に、賢治の代表作である「風の又三郎」と「銀河鉄道の夜」に触れながら、賢治の人間や自然への見方について考えてみよう。

「風の又三郎」は父の転勤にともなって転校してきた又三郎という少年を、同級生の視点で描いたものである。どこからともなくやってきて、いつのまにか消えてしまう又三郎は、風のような少年である。同級生たちに連れられて、又三郎は馬を追ったり、葡萄蔓取りにいたり、川で魚を獲ったりするのだが、又三郎はいつも思いがけない行動をする。皆が又三郎が何者なのか不思議がっているさなか、又三郎は風のように去っていった。

この小説の又三郎は、中学生の頃から山で野宿をしていた賢治そのものかもしれない。魚がたくさん捕れたのち、次に行くと一匹も捕れなかった。そのとき又三郎は、「向こうの雲の峰の上を通る黒い鳥をみていました」とある。少しわかりにくいのが、黒い鳥とはカワウで、すでに川の魚を食いつくしたことを示唆したものかもしれない。カワウは川や湖の魚を大量に食べ、水産業に損害を与えることが近年問題になっている。

野宿をしていた賢治は、夜の山で宇宙を見ていたのだろう。「銀河鉄道の夜」は、主人公のカンパネラが親友のジョバンニとともに、銀河へ向かう列車に乗る話である。この列車でカンパネラは不思議な人々と出会う。牛の祖先の化石を採ろうとする人、鳥を捕る人、氷山に船がぶつかって遭難した人など、いずれもあの世へ向かっていたのだ。やがてジョバンニも消え、目をさましたカンパネラはジョバンニが友人を助けに川に入り、死んだことを知る。銀河へ向かった列車で出会った人々はすでに死んでいたのだった。時空を超えた話は、いまでもこそドラマや映画でよく見るが、1900年代の初めに賢治はそれを描いていた。船で遭難した人とはタイタニック号の乗船者であり、賢治はそれをニュースで知っただけ。時空を超えた物語は、賢治の時代には独創的で傑出していたと思う。

宮沢賢治の生物観

賢治はいわゆるエリートではない。地方の農学校を卒業したのち、家業を手伝ったり、法華教（とくに国柱会の教え）に傾倒したり、印刷所で働いたり、さまざまな経験を積む。東京に出たのち、国柱会の影響を受けて創作活動を始め、その後花巻に戻って農学校の教師になる。この間、同性の友人に失恋したり、愛する妹が亡くなったり、感情の起伏は大きく、何もかもうまくいっていただけではなかった。やがて農学校を退職して農業指導に励み、最後は碎石工場の技師となるが、もともと病弱であったこともあり、若くして一生を終えた。同人誌や地元の新報に作品を発表していたが、原稿料を受け取ったのは「雪渡り」という作品だけであり、出版されたのは「注文の多い料理店」と詩集「春と修羅」だけだった。

法華経の影響を受けたこともあり、賢治の眼差しは社会や自然の弱者の側に向けられている。ダーウインの進化論でいう弱肉強食や適者生存とは対極的で、奢れるものがしつぺ返しを受ける話が多い。人間と動物、動物と動物とのかかわりについては、互いに理解することの重要性を説いている。一方で、お坊さんの説教をよく聞いていたフクロウの子が最後には無残に殺されてしまったり、友人を助けようとしたジョバンニが死んでしまったりするなど、賢治の小説は必ずしもハッピーエンドではなく、宗教に縛られているわけではない。自然の中で日々を送っていたこともあって、動植物やその生息場所の地形、天候、さらに宇宙の星々について科学的に観察しており、その記述は精密で驚嘆する。野宿しながら、賢治は当時入手することができた書物を読み漁り、ダーウイン、カント、ヘーゲルを学んでいたと推測される。「グスコブドリの伝記」は最後に自己犠牲によって人々を助けるという点では宗教的であるが、その手法は先に述べたように科学的である。賢治は貧しい農民を助けるために、農業の方法、とくに肥料の開発と普及に心血を注いだ。そこには、ただ宗教に依存するのではなく、科学的に生産を上げる方法を模索していた賢治の姿がある。

賢治はグリム童話やアンデルセン童話も読んでいたと思われる。賢治の「クンねずみ」という作品は、グリム童話の「猫とねずみとお友だち」に、最後はねずみが猫に食べられてしまう点でよく似ている。一方で、賢治の作品はヨーロッパの古典童話に比べて、自然や動物の描き方が生々しく、宇宙への視点があり、風や雨、雪などの天候の変化に満ち、動物の個

性が際立っているように思われる。カエルが急に王子様に戻るといような乱暴な展開はない。

賢治の視点はある一つの点にとどまることなく、ありとあらゆる方向から展開する。動物についても、それが他の動物とさまざまな関係を結び、個体数を変化させ、食物連鎖の中で一定の位置を占めることを理解していた。動物記として世界中に愛読者がいるシートンが日本に紹介されたのは1935年、賢治の没後2年たった頃である。日本で動物社会や生態学の研究が始まったのも、賢治が一生を終えたのち、1930年代の後半以降である。今西錦司による「すみわけ論」や京都大学で始まった霊長類の研究が結実したのは1950年代であり、やはり賢治は知る由もなかった。

今西錦司は競争を中心に考えたダーウィンと対極的に共存を中心にした進化論や動物社会学を提唱し、その流れは京都大学によるニホンザルやアユの社会研究に発展していった。一方で、当時の動物社会学や生態学は、集団の秩序を重んじ、順位は群れの秩序を、なわばりは集団の健全性をもたらすと考えた。そこでは弱者は集団の秩序や健全性のために切り捨てられるものであり、この点で賢治の世界観とは異なっていた。

やがて、社会生物学の発展によって今西の世界観も、初期の動物社会学も書き換えられ、現在では社会の中の個体はそれぞれ利己的に振舞うことが広くみとめられている。個体はその遺伝子を次世代に残すべく、それぞれの利得のために最善の方法で行動し、互いに競争したり共生したりすると考えたのである。さらに近年の研究では、生物がいずれもいかなるときにも適応的にふるまうというわけではないことも認識されつつあり、自然科学の見方と文学による見方が接近しているといってもよいだろう。この見解は私が執筆した「個性の生態学」で述べたとおりである。賢治の動物たちは、利己的に競争したり、人にやさしく接したり、傲慢であったり、個性に富んでいる。それを全体として眺めると、実際の動物についてかなりの的を得ていたのではないかと、私は思っている。

西洋の童話では、醜い、あるいは性格が悪いと決めつけられるようなものについても、賢治の物語を読むと、そのほんとうの生態はちがうことを教えられる。環境科学についても、発電や火山の爆発、水銀の毒性などに関連して、賢治は鋭い洞察をしていた。宮沢賢治は田舎の自然に囲まれて育った純朴な青年というだけでなく、日本を代表する童話作家であるとともに、人間社会と生物について考察した偉大な先駆者として評価するべきである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、長野県カルチャーセンターMIDORI 教室の講座「宮沢賢治と小川未明」で賢治の作品について興味深く教えていただいた小埜裕二先生に深い謝意を表したい。

引用・参考文献

今野勉（2020）宮沢賢治の真実 新潮文庫
片野修（1990）個性の生態学 京都大学学術出版会
宮沢賢治（1988）風の又三郎 角川文庫
宮沢賢治（1996）ゼロ弾きのゴーシュ 角川文庫
宮沢賢治（1989）新編 銀河鉄道之夜 新潮文庫
宮沢賢治（1989）新編 風の又三郎 新潮文庫
宮沢賢治全集 5-8（1985-1986）ちくま文庫
小埜裕二（編）（2021）文学の体験—小川未明と宮沢賢治 永田印刷出版部